

墓なし  
戒名なし  
法事なし

天翔の里  
自然葬・生前葬

日本で唯一可能な  
本当の供養

## はじめに

最近では、お墓のことで悩んでいる方のお話を、聞く機会が増えたように思います。

親が介護施設に入ってしまった、実家の墓の管理を任されているが、この際、墓終いをしたい。でも、どうすればいいのだろうか、自分が死んだ後は、お墓や供養のことで、家族に迷惑をかけたくない、自然葬をしたい。でも、死んでからのことなどで、どうなるのか心配など、色々あるようです。

そこでこの小冊子では、一度の供養で永代供養も済み、その後お墓も要らない、毎年の年忌供養を家族がする必要ない、戒名も仏壇も要らない、まさに未来型の自然葬・生前葬についてご紹介します。

今まで先祖のお墓の問題や、ご自身の死後の供養について考えてきた方にとって、これ以上ない最高のご提案になると思います。

# 目次

はじめに	2
父親が突然死んだ15の冬	4
本当に両親は成仏しているの？	9
実は両親は成仏していなかった	11
天翔の里の自然葬・生前葬	13
お墓も仏壇も先祖供養も要らなくなります	17
分かち合いの権利が得られます	20
檀家制度の始まり	20
命日や先祖供養はお寺の集金制度	25
お寺が檀家の葬式をするようになった	26
戒名は出家者が師匠にもらう名前	27
寺院の金儲けの年忌法要	30
お墓はどうしたらいいか	32
死んだ人にいつまでも縛られない生き方	35
樹木葬や海洋葬について	37
よくある質問	39
おわりに	47

## 父親が突然死んだ15の冬

私が中学3年の、高校受験を間近に控えた2月のある寒い朝、父親が突然他界しました。前日まで元気だった父が、朝、布団の中で帰らぬ人となっていました。

死因は急性心不全でした。糖尿病などを患っていたためか、心臓に負担がかかっていたのかもしれない。

母親は、自分の横で寝ていた父が、朝には突然死んでいたため、慌てふためき、何をどうしていいのかノイローゼ気味になりました。

それで集まった親戚たちが、母親に代わって葬式をどうするか話し合っているのを、聴いていたのを覚えています。

死んだ後のことなど、誰にもわかりません。そうなる  
と死んだ人のことを専門に扱っている、葬儀屋さんやお  
寺のお坊さんに聞くしかないわけです。そこで親戚の叔  
父さん達が話していたのは、

- 死んだ仏さんを成仏させるには、お坊さんの数は  
多い方がいい。
- 紫の袈裟を着た位の高いお坊さんと呼んだ方が  
いい。
- 棺は少しでも高価な方がいい。
- 祭壇はできるだけ豪華な方がいい。
- 戒名は院号が入った高い戒名がいい。

そんな話を耳にして、子供ながらに(そういうものな  
んだ~~。)(そうしないと成仏できないんだ~~。)と思  
いながら、大人の話しを聞いていたのを覚えています。

その後、さらに寒いお寺の本堂で葬式を行い、火葬  
場で火葬を済ませました。お墓のなかった私の実家で

は、骨壺に入れて、暗く、薄気味悪いお寺の納骨堂に、骨を納めました。

そして、毎年お盆になると家族でお寺にお参りに行きましたが、行くとたびに、(自分も死んだらこんな気持ちの悪いお寺に置かれるの、嫌だなあ〜。)(こんな所に入りたくないあ〜。)と、子供ながらにいつも思っていました。

その後、25年ほどして母親も他界し、その時に、当時住んでいた札幌郊外の霊園にお墓を建てて、二人の遺骨をそのお墓に納めました。

薄気味悪いお寺の納骨堂から、お墓に両親の遺骨を移したので、これで幸せになったかなあと、勝手に安心していました。

こうして、私の両親は無事にお墓に入り、幸せになったと思っていたのですが、実はそうではなかったことを後になって知りました。

その理由はまた詳しく説明しますが、この小冊子を読まれる方も、きっと様々な思いで、自分の両親やご先祖を供養されていることと思います。

しかし、その供養では本当に亡くなった先祖が幸せになっていると、断言できるでしょうか？ 幸せになって欲しい・・・そのような希望を持っているでしょうが、亡くなった後のことは、生きている者にはわかりません。

勝手にこのやり方がいい、こんな供養をすればいいはずだと、お坊さんや、他の誰かに聞いたやり方を信じて、供養をしているのではないのでしょうか。

この小冊子では、本当に亡くなった人たちが幸せになれる供養とはどんな供養なのか、考えてゆきたいと思います。

もし、終活でご自分の葬儀のことを考えていたり、あるいは実家のお墓の問題や供養について悩みを抱えている方には、きっとお役に立つと思います。

## 本当に両親は成仏しているの？

私の両親の遺骨は、私が札幌近郊に建てたお墓に移して、そこに埋葬したことは先ほども触れました。

やれやれと安心していたものの、仕事の関係で当時住んでいた札幌から離れ、現在は兵庫県に住んでいます。そうすると今度は、毎年のお墓参りに、札幌まで行かなくてはならないという問題が生じて来ました。

しかし、すでに両親も他界して、実家もない札幌まで、お墓参りのためだけに帰るというのもなかなか大変です。それでも札幌へ行った時は、レンタカーを借りてお墓参りに行くのですが、

(本当にお墓参りすると、両親は喜んでいるのだろうか？)

ふと、そんなことを思う時がありました。

（そもそも、残された家族がお墓参りを続けないと、死んだ人たちは成仏しないのだろうか？）

そんな疑問を抱くようになりました。

はっきり言えば、死んだ両親があの世でどうなっているのかは、全くわかりません。それでもお墓参りに行くのは、正直に言えば、自分の気持ちのためだけに行っているのです。

お墓参りに行くと、（あ～～なんだかスッキリした）と感じるのは私だけでしょか。

お墓参りに行けないと、どことなく罪悪感が残り、行けばスッキリする。それは亡くなった人のためではなく、自分の自己満足のためにお墓参りをしているだけかもしれません。

本当にこれで、両親や先祖は幸せになれるのでしょうか？私は疑問に思うようになりました。

しかもそのお墓には、私の両親の遺骨しか入れておらず、それ以外の祖父母や曾祖父母や、他の先祖達の遺骨がどうなっているのか、誰が供養しているのかもわかりません。

こんなことで、先祖達は幸せになれるのでしょうか？そう考えると、今までの先祖供養のあり方に疑問を感じるようになりました。

## 実は両親は成仏していなかった

その後、私は知人の紹介で、九州大分県の日田市の天翔の里で行われている、自然葬・生前葬のことを知りました。

そして衝撃的なことを聞きました。それは、今までの供養のやり方では、ほとんどの先祖達の霊魂は、成仏することなく、どこかを彷徨っていると言うのです。

どんなに立派なお墓を立てても、その墓に骨を置いて、両親の霊魂は幸せにはなっていないことを聞いたのです。

正直驚きでした。世の中のほとんどの人の霊魂が、成仏することなく、どこかを彷徨っていると言うのです。

いったいどうしてなのでしょう？

それは、本来人は、他の動物達と同じく、土に還して、自然回帰をすることが望ましいとされています。

しかし今は遺骨を立派な焼き物の骨壺に入れてしまうために、骨が何年経っても土に戻ることができないそうです。そのために自然に戻ることができないそうです。

それで何年経っても、成仏しないということを知りました。

一般的に、死んだ後には、初七日、四十九日、一周忌、三回忌、十三回忌と、いつまでも死んだ人の供養が続きます。

それでも、一向に成仏できないでいる……。それが実際に起きていることだと知りました。

## 天翔の里の自然葬・生前葬

そこで、私は両親を成仏させるために、2020年8月に、天翔の里で「自分自身の生前葬」を行いました。

両親の供養ではなく、自分自身の生前葬を行ったのです。なぜでしょう？これが天翔の里の凄いところでした。

この天翔の里では、

- すでに亡くなっている人を供養する自然葬

- 自分がまだ生きているうちに自分の葬式を済ませる生前葬

を行っています。

生前葬では、自分自身の供養を済ませることで、自分が亡くなった時にすぐ自分の魂が自然界に還って成仏ができます。

それだけではなく、両親、そして両親の祖父母、さらに曾祖父母と続くご先祖達全員が、一斉に成仏して自然界に還って行くことができます。

つまり自分自身の生前葬と、すでに亡くなっているご先祖全員の自然葬を、一緒に行うことができます。

自分が死んだ時の魂と、両親の魂と、亡くなったご先祖の中で、成仏できていない全てのご先祖の魂を、一度で成仏することができるという、凄い場所が天翔の里でした。

なぜそのようなことが、この地でできるのかと言うと、天翔の里は世界でも稀な聖地と呼ばれる場所なのです。

そのため非常に高いエネルギーがあり、自然界にある不思議な力が働いて、亡くなられている人たちが一斉に成仏します。

さらに驚きなのが、配偶者がいる方は、自分が生前葬を行うと、配偶者の直系のご先祖全ても、一斉に成仏されます。

私の場合は、123,935人が成仏されてゆきました。

この時、成仏する霊のほかに、見送り霊も集まって来るそうです。これは、成仏する先祖とは違い、関係者の靈魂が、見学しに来ます。私の時は73人の霊が見送りに来ました。

私の場合は12万人台でしたが、人によっては、数千人、数百万人や、中には数兆人という、とてつもない数の先祖が成仏される方もおります。

それくらい多くの先祖が成仏しておらず、幸せになりたいと願う先祖達が、何とかして欲しいと言う苦しい思いを抱いているのかもしれない。

実際に天翔の里で生前葬を行なった方から、今まで抱えていた問題が、自然と解決したと言う嬉しいご報告を頂くことがあります。

結果として嬉しい報告も数多くあるようですが、はじめからそれを期待して行うことは、本来の目的ではありません。

天翔の里の自然葬、生前葬は、ご先祖達を幸せにできる、感謝の想いで行うのが、本来の形なのです。

## お墓も仏壇も先祖供養も要らなくなります

天翔の里で自然葬を行うと、ご先祖達は一斉に成仏されます。そうすると、今までのようなお墓に遺骨を置いて、お墓参りをする必要がなくなります。

先祖達は皆成仏して幸せになっているので、残された家族がその後の供養をする必要が、いっさいなくなるのです。

さらに家に仏壇を置いて、位牌を祀って、お線香や蠟燭を焚いて、毎月の月命日に、お坊さんに来てもらう必要もありません。

当然、毎年毎年のお墓参りも、十三回忌、五十回忌と続く供養も、しなくて済みます。

つまり先祖達の面倒を、残された家族がいつまでも、いつまでも見続けると言う煩わしさから解放されるのです。

私は、妻や子供達に今から伝えてあります。

「お父さんが死んだら、お墓にも入れなくていいし、お参りとかも一切しなくていいからね。」

と。なぜなら自分の生前葬は終わっているので、死んだらすぐに成仏することが約束されています。

もし私が山かどこかで遭難して、遺体が発見されなかったとしても、問題ありません。必ず成仏して自然界に還っていけることが、生きている今、すでにわかっているのです。

これがどんなに有り難く、安心した気持ちになるか、お分かりいただけるでしょうか？

あなたも、自分の死後はいったいどこに行って、どうなるのだろうかと言った、漠然とした不安を持っていませんか？

天国と言われる場所へ行けるのだろうか？もしかしたら人から恨まれて、閻魔様のいる地獄へ落ちてしまうのでは無いだろうか？そんな死後の世界への不安を抱いている人もいるかもしれません。

でも、天翔の里で生前葬を済ませると、その不安から完全に解放されます。

自分の死後の行き先がはっきりと分かっている安心感。これは生前葬をしたみなさんが、口を揃えて言われることです。

## 分かち合いの権利が得られます

天翔の里で生前葬を行うと、権利書が発行されます。それが発行されると、天翔の里の自然葬・生前葬を身内や知人に紹介することができるようになります。

天翔の里で供養を行った方が、その喜びを人に伝えることで、先祖を幸せにする、喜びの輪が広がってゆきます。

天翔の里へ、お知り合いの方をご紹介されると、佛信堂より、感謝の分かち合いがお礼として支払われます。

詳しくは、よくある質問をお読みください。

## 檀家制度の始まり

そもそも今のような供養の形というのは、いったいつ頃から、どのようにして始まったのでしょうか？

縄文時代の昔から、お坊さんが葬式にお経をあげに来ていたのでしょうか？

そんなはずはないでしょう。そこでこの小冊子を書くにあたり、「お墓、葬式、戒名は本当に必要か」(ひろさちや著)を参考にして、先祖供養の歴史について、調べてみることにしました。

昔は誰かが亡くなると、村人達で集まって、自分たちで弔いをしたようです。

それが、お寺が檀家の管理をするという、今の制度が始まり出したのは、江戸時代の頃、江戸幕府がキリシタンを弾圧したことに関連があることがわかりました。

キリシタンとは、1549年にイエズス会のフランシスコ・ザビエルが日本に伝えた、ローマ・カトリック系のキリスト教のことです。

特に16世紀から、17世紀初頭にかけて、西日本を中心に全盛期を迎えました。

ところが豊臣秀吉がその布教に脅威を感じ、キリシタンを禁教にしました。しかし南蛮貿易は許すという中途半端だったために、影で隠れてキリシタンの布教は行われていました。

それを全面的に実質禁止にしたのが、徳川幕府でした。なぜなら、当時のローマ・カトリックの布教は、背後に軍事力を控えており、まずは教会領という拠点を作り、そこから侵略を始めるためのものだったからです。

もし秀吉や徳川幕府の禁教政策がなかったら、日本はヨーロッパの植民地になっていたかもしれないという

説もあります。このような経緯から、キリスト教が禁止になりました。

しかし幕府がいくら禁止にしても、陰でこっそり信じている信者がいるかもしれません。そこで幕府が作った制度が「檀家制度」「寺檀制度」と呼ばれる、寺請制度です。

幕府はキリシタンを見つけると、改宗を命じて、お寺から「寺請証文」を発行させて、仏教徒にさせました。それに従わないものは、死刑にしたのです。

はじめはキリシタンから仏教徒に改宗した者だけに、この寺請文証を発行していましたが、そのうち全ての人に発行するようになりました。

これが寺請制度、檀家制度の始まりです。檀家になると、お寺にお布施を納める義務が生じます。そしてお寺はお布施の徴収機関になってゆきました。

そのために「宗門人別改帳」というものが作られました。これは一戸単位で作成され、家主と家族全員の名前、奉公人の名前と性別・年齢が記載され、そこに宗旨と檀那寺名が記載され、住職と村役人が請印を押すと、寺請文証になります。

こうして仏教寺院は、市役所の戸籍係になっていったのです。

それだけならいいのですが、お寺はその権力を使って、村人に恫喝をするようになってゆきました。

「お寺を粗末に扱っていると、宗門人別改帳に請印を押さないぞ！」

というものです。もし請印を押してもらえないと、キリシタンとなって死刑にさせられます。

こうして幕府にとって民衆の思想統一に都合が良く、お寺は檀家からお金を集め易いというお互いの利益

から、キリシタンがいなくなった後も檀家制度を存続させました。

## 命日や先祖供養はお寺の集金制度

そこでお寺はさらに調子に乗りました。寺側は勝手に幕府が新しい掟を作ったという偽の情報を流し、檀家を都合よく利用してお金を集めました。

「御条目宗門旦那請合之掟」という、ありもしない掟を偽作したのです。そこにはキリシタンの疑いをかけられたくない者は

- 寺の行事に参加をすること
- 寺の雑役・修理・建立をつとめること
- 葬式は旦那寺の指図を受けること
- 死者に剃り刀を与え、戒名をつける時は死相をとく見届けた上で、引導を渡すこと
- 中陰・年忌・命日・あるいは先祖供養を怠らな

いこと

と言った掟が細々と記されていたそうです。こうして、何かにつけてお金を徴収したり、高い戒名を請求したり、命日や先祖供養と称してその度にお金を稼ぐという制度が、江戸時代に始まりました。

## お寺が檀家の葬式をするようになった

さらにお寺が、檀家の葬式も行うようになってゆきました。

キリシタンはキリシタン流の葬儀をすることで、天国へ行けると信じていました。しかし日本人の習俗による葬儀をすると、天国へ行けなくなります。

そこで幕府は、仏教の僧侶に葬式をさせることは、キリシタン禁教政策に都合が良かったのです。そうして

幕府の意向を汲んで、また寺院側のメリットもあり、お寺は檀家の葬式もするようになりました。

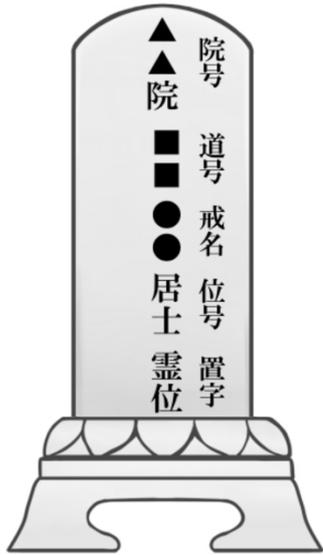
ところが、お坊さんが困りました。なぜなら、お葬式はそれまで民衆が自分たちでやっていた。そのため、どんなふうに葬式をすればいいのか、お坊さん達にもわからなかったのです。

そこで、お坊さんは、自分たちの出家者仲間で行っていたやり方で、お葬式をするようになりました。これが現在も行われている、葬式仏教の葬儀のやり方になってゆきました。

## 戒名とは出家者が師匠にもらう名前

今の日本では、死んだ人には戒名をつけます。これは元々、出家して仏門に入った人が、師匠につけてもらう名前が戒名です。

出家者になると授戒と言って、仏教に帰依する戒律を授かります。この時の名前が戒名です。通常は2文字です。



さらに、悟りを開いた人がもらう名前が、道号です。これも2文字です。今日では死ぬと、悟りも開いていないのに、戒名と道号の合わせて4文字が一般的です。

大学も行かずに医師免許をいただくような事ですから、それは、それは、高い戒名料が必要かもしれません(笑)。

院とは、天皇や貴族などが引退して出家をした際に、お寺の中に周囲を高い壁に囲まれた大きな建物(院)を作って、そこで修行をしたそうです。その建物を▲▲院と呼んだそうです。

位号は宗派によっても違い、ランクも様々あります。一般的なのは「…信士」(男性)、「…信女」(女性)で、仏教を信じているという意味です。

しかし、中には俺は金持ちで一般人と一緒に嫌だと言って、「…居士」(男性)、「大姉(だいし)」(女性)をつけます。

これが戒名の由来だそうです。

以前テレビで、戒名を付ける際に、お坊さんもあれこれ考えるのが大変だそうです、自動で戒名を考えてくれる、コンピューターソフトで戒名を決めているのを観ました。

そもそも死んだ後に、あの世で戒名など必要なのでしょうか？あの世では、「何とか院・何とか居士さ～～ん」と、死んだ人同士が呼び合っているのでしょうか？

昔から、子供ながらに疑問でした。

それで私の母親の葬儀の時は、お坊さんも呼ばずに、家で家族葬を済ませ、戒名もつけず、本人の名前のままでした。

## 寺院の金儲けの年忌法要

江戸時代の葬式仏教では、檀家制度を利用して、あの手この手で檀家に金を出させるようになりました。それで葬式だけで終わらせず、年忌供養を義務付けました。

四十九日法要・百か日法要・一周忌法要・三回忌法要・七回忌法要・十三回忌法要・十七回忌法要・二十三回忌法要・二十七回忌法要・三十三回忌法要

さらに五十回忌法要まであります

もともと四十九日の法要は、インド人の習俗で、仏教を通じて日本の習俗になったそうです。

百か日の法要、一周忌、三回忌は中国起源で、「礼記(らいき)」に典拠があるそうです。

七回忌以降が、江戸時代から日本で始められたそうです。

しかし江戸時代より以前は、墓参りなどもなかったようです。昔は捨て墓と言って、死体をどこか山に捨てたり、埋めてくるだけです。ですので、毎年の墓参りなどもなかったようです。

ではこれでは死んだ人は成仏できないか？ということそんなことはありません。そのまま土の中に埋めますから、他の動物達と同じように全て土に還って、自然回帰ができます。この方が自然なのです。

しかし現代のように、遺骨を立派な骨壺に入れて、お墓などに置いておくと、何年経っても骨が土に還らないので、成仏ができなくなるのだそうです。

話はそれでしたが、このように江戸時代以降お寺が金儲けのために始めたのが年忌法要です。

そしてお寺は、年忌法要をきちんとやって、ご先祖の霊を慰めないと、霊のたたりがありますよ・・・と檀家を脅して、年忌法要で儲ける。これが葬式仏教の商売となってゆきました。

この壺を買わないと、不幸になりますよという、靈感商法と同じような手法が、江戸時代に作られていったのです。

## お墓はどうしたらいいか

昨今の日本人は、遺骨にこだわりを持っているようです。しかし昔の日本人は、遺骨はどうでもいいと思っていたようです。

それは、昔は土葬で、そのまま死体を土に埋めていました。戦後も日本は混乱期で、今のように火葬場へ行って火葬をするということもありませんでした。

1977年に出版された、『日本の葬式』(井之口章次著)によると、1970年代では、まだ多くの地域が土葬だったそうです。火葬になって行ったのは1980年以降と言えます。

インドでは火葬を行うそうですが、骨は全てガンジス川に流して終わりです。

ところが日本では、火葬した後の遺骨を、立派な骨壺に入れて、今度はお墓の中に埋葬します。

なぜこのような形になってしまったのでしょうか。

昔お墓は、死体を埋葬した場所に、目印となるものを置きました、これを「埋め墓」と呼びます。そして死体が化けて出ないように、そこに置いた石が、墓石の起源になりました。

ですので、墓場は怖くて誰も行きません。埋め墓にはお参りには行かないのです。

ところが関西地方では、埋め墓の他に「参り墓」を作りました。それは埋め墓で白骨化した骨を移して、別の場所に墓を作るのだそうです。

あるいは全く遺骨のない墓もあります。このように埋め墓の他に、参り墓を作るのが両墓制です。

参り墓には火葬された遺骨を祀ることで、そこには死んだ人の霊がいると思うようになります。こうして日本人は、遺骨に対して強いこだわりを持つようになって行ったといえます。

しかし、火葬したあとの遺骨には、もう何もありません。お墓に行っても誰もいないのです。

昔、千の風になってという曲が大ヒットしました。

私のお墓の前で泣かないでください。

そこに私はいません。眠ってなんかいません。

という歌詞でしたが、本当にそうなのです。それにも関わらず、遺骨には死んだ人の霊がいると思い込んでいるのが、現代の日本人です。

特に悪いのが、悲しみのあまり、遺骨を家に置いたままにすることです。これは絶対にやめた方がいいそうです。体に不調が起きる場合があるそうです。

## 死んだ人にいつまでも縛られない生き方

こうして考えてみると、私たちは、江戸時代から始まった檀家制度の影響を受けて、死んだ人の供養のために、いつまでも不安を感じながら、縛られ続けてきたことに気がつくのではないのでしょうか。

死んだ人に戒名をつける必要がある

仏壇を家に置かなくてはいけない

位牌をいつまでも持っていないといけない

お墓を建てて遺骨を置かなくてはいけない

年忌法要を続けなくてはいけない

死は突然やってきます。突然家族の誰かがが他界し、残された家族が、何もわからないまま、これらのことを行わなくてははいけません。

死んでからも、家族に迷惑をかけ続けなくてはいけないのが、今までの供養なのです。

あなたが亡くなった後、残された家族に、そんな迷惑をかけ続けたいでしょうか。家族を漠然とした不安で、いつまでも縛り付けたいでしょうか。

この機会に、残された家族に一切迷惑をかけない、自分自身の供養のあり方を、考えておくことが大切ではないでしょうか。

## 樹木葬や海洋葬について

最近では、お墓を作らずに、散骨したり、山などの土に埋葬する自然葬も増えてきています。

それらの自然葬・生前葬についても見てゆきましょう。

### ▶▶生前葬 78万円～(K社)

生前葬を生きているうちに執り行うのが、一時ブームになりました。これは生きている間に、ホテルなどに友人や知人を呼んで、自分の葬儀を終わらせてしまうというものです。

死んでしまってからでは、自分の葬式がどんな葬式になるのか分からないので、生きている間に親しい人を呼

んで、ありがとうを伝えたり、楽しく別れを告げる挨拶を  
してもらおうようです。

しかしこれは単なるセレモニーであり、実際に自分の  
の魂が供養されるわけではありません。これを行なった  
から本当に死後、成仏できるというわけではありませ  
ん。

#### ▶▶樹木葬 20万円～(E社)

お墓を作る代わりに、遺骨を土に埋めて、その目印  
としてその上に木を植えるのが樹木葬です。永代供養  
も済ませることができ、自然に合った形と言えます。

ただし、樹木葬を行なったからと言って、天翔の里  
のように個人が必ず成仏したり、ご先祖が一斉に成仏  
するということはありません。あくまでも石のお墓の代  
わりです。

## ▶▶海洋葬 50万円～(E社)

火葬した遺骨を船で海に持ってゆき、海に散骨します。お墓を作る必要がないので、経済的ではありません。

お墓参りなどをしてほしい場合は、近所の寺院に行ってお参りすることもできますようです。

ただし海洋葬を行なったからと言って、天翔の里のように、故人が必ず成仏するかどうかはわかりません。他の供養と同じように、いつまでも年忌法要をしないとまらない不安は消えるわけではありません。

## よくある質問

1回で永代供養も済み、お墓も要らず、年忌供養も要らず、そして自分の魂と、ご先祖全員の魂の成仏ができる天翔の里は、他にはない世界で最も素晴らしい最高の供養です。

そこで、天翔の里の自然葬・生前葬についてよく聞かれる質問をまとめてみました。

**Q:天翔の里はどこにありますか？**

住所は、大分県豊後高田市水崎 1205 です。  
JR 日豊本線「宇佐駅」より車で 10 分。

**Q:生前葬・自然葬はいつ行われますか？**

毎月第2日曜、第2水曜・第4水曜の午後2時以降に行われます。

**Q:どこが管理・運営していますか？**

株式会社 佛信堂という葬儀会社(0978-22-4444)が管理をしています。

**Q:生前葬や・自然葬は本人も行く必要がありますか？**

本人が来られもいいですし、代理で他の担当者にお  
願いすることもできます。

**Q:費用はおいくらですか**

生前葬は永代供養が20万円、埋葬費用10万円  
の、合わせて30万円(税込み)で、すべて行えます。

その後、追加で生きているご家族の方を生前葬したり、亡くなっている方の自然葬を行う場合は、お一人につき10万円です。

**Q:なぜ自分の魂や先祖の魂が一斉に成仏できるのですか？**

一つには、この天翔の里という場所が世界でも極めて稀な、波動の高い聖地のため、全員が成仏してゆきます。

二つ目に、この地を管理されている方が、自然界の中にある素晴らしい働きと繋がっているために、自然の中の不思議な働きの中で、亡くなられた魂が成仏されます。

**Q:お墓にある遺骨はどうしたらいいでしょうか**

遺骨自体は単なるカルシウムの粉になりますので、ご自分で火葬場に持って行って処分されても構いません。

遺骨をそのままゴミに捨てると、刑法190条に「死体、遺骨、遺髪又は棺に納めてある物を損壊し、遺棄し、又は領得した者は、三年以下の懲役に処する」と定めてるので違法になります。

ただし散骨が増えてきた1991年に法務省が散骨について「節度を持って行えば違法ではない」という方針を出しました。

「節度」とは、2つのポイントがあります。

1つは遺骨を「骨」とわからないレベルに砕くことです。散骨業者の自主規制では、直径2mm以下に遺骨を砕くことになっています。

2つ目は、他の方が散骨したことを知った場合に、不快にならない場所に遺骨を撒くことです。それは山や、海です。しかし勝手に撒くとトラブルになる可能性もあるので、許可をいただくことも大切です。

詳しくは一度佛信堂にご相談されてみて下さい。

**Q: 宗教や宗派・国籍などに影響しますか**

宗教や宗派、国籍などは一切関係ありません。

**Q: 分かち合いについて教えてください**

新規で生前葬を行うと(30万円)、権利書が発行されます。権利書が発行されてから、ご親戚や、ご友人などに天翔の里での供養をご紹介すると、佛信堂より、分かち合いとして10万円をいただくことができます。

佛信堂は広告や宣伝をしておらず、天翔の里の管理運営だけを行なっています。自然葬・生前葬は、実際に供養を行われた方の喜びの声で広がっています。そのため、ご先祖への感謝を広げて頂いたお礼として、佛信堂が分かち合いのお礼をさせていただきます。

## おわりに

いかがでしたでしょうか。

歴史から見て、檀家制度ができた、今のようにお寺が亡くなった人の供養をしたりするのは、江戸時代にキリシタンを禁教にするための江戸幕府の政策から始まりました。

毎月の月命日、毎年の年忌法要、それ以外にも何年かごとに法要が行われ、ご先祖を供養するという名の下に、寺のお金儲けに、民衆は利用されてきたのです。

このやり方に、いまだに多くの日本人が縛られているのではないのでしょうか。

先祖供養をしないと、先祖は幸せになれないという、漠然とした不安を抱きながら、先祖の供養をし続けている人たちが多いのかもしれませんが。

もしあなたがこの世を去った後に、残された家族の人たちに、同じような漠然とした不安を残し、いつまでもあなたの供養のために家族たちが精神的に縛られてしまう…。

このようなことを、あなたは決して望んではいたはずで

天翔の里での自然葬・生前葬でしたら、生前葬をされたご本人の霊魂だけでなく、ご先祖も皆一斉に成仏できると言う、最高の供養が行えます。

残された家族に、お墓も、戒名も、年忌供養の負担を残さずに済みます。

この素晴らしい天翔の里の自然葬・生前葬で、あなた自身や、亡くなられたご両親、ご先祖の方全員を、一斉に幸せにしてあげてください。

もし関心を持たれましたら、ぜひ一度ご連絡をお待ちしています。

## 自然葬・生前葬のお問い合わせ

自然葬・生前葬に関してのご質問などは、遠慮なくご連絡ください。わかりやすく丁寧にご説明させていただきます。

090-3115-772

info@2006nature.pw

藤井照久

文責:藤井照久  
初版 2021年7月14日